

中国北方民族オロチョンの民族イベントに おける「伝統」意識

——建旗 60 周年記念大会を事例に——

坂 部 晶 子

1. 問題の所在
2. 三度の歴史的飛躍というシナリオ——建旗 60 周年記念大会
3. 伝統的祭の再興と民族的伝統への意識
4. 「強いられた主体性」そのものを生きること
5. むすび

1. 問題の所在

中国における「民族」を考えるさいに難しいのは、「国家によって認定された少数民族」ということをどのようにとらえるか、という点である。中国社会の民族構成は、圧倒的なマジョリティである漢民族と、あわせても一割に満たない 55 の少数民族からなっており、個々人が携帯する身分証の「民族」欄にはこの認定民族が記載されているように、すべての中国公民が何らかの民族に振り分けられている。

中国共産党による新中国成立以降の民族政策は、いっぽうでは、国民党時代の極端な同化主義政策にたいする批判にもとづいており、先行する社会主義政権であったソ連の民族理論に影響されつつ成立してきた。それゆえ当初より多民族国家が標榜され、諸民族の基本的状況や人数を把握するために、1950 年代初めより、各地に中央からの訪問団が送られ、民族の名称や言語、歴史、人数などを調査する「民族識別工作」が行われた。この民族識別によって、「制度によって保障された民族」が確定することになる。

しかし、こうした民族識別は当然ながら、さまざまな民族集団や少数グループの意思をすべて満たしたものではない。人類学者の劉正愛は、「当時自己申告した民族名称は 400 余りだったが、スターリンの『共通の地域・言語・経済生活・文化心理的要素』という民族定義を指針に、国家の主導によって識別工作が行われた。しかし、調査者側の識別基準や判断と当該民族側の意識とのずれなど、実際の作業においては様々な混乱が見られ、上記の基準に合わない事例もあった」（劉 2006：41）と指摘する。また、このとき識別された諸民族は、「ソ連の民族理論に影響されつつ、中国の独自性として、民族平等のため

に呼称上全ての民族をいかなる差異もなく『民族 = nationality』と称した」（シンジルト 2003：47）とされる。現在の中国社会において、数億人もの人口を擁するマジョリティとしての漢民族はおくとしても、それ以外の民族については、人口という指標だけに限ってみても、数千人規模のものから千数百万人規模のものまでさまざまな民族があるにもかかわらず、外面的には「少数民族」として一律に確定され、アイデンティファイされている。こうした状況を「制度によって保障された多民族性」と呼ぶとすれば、それをつくる下地が、この民族識別工作にあったと考えられよう。

「認定された民族」の制度的な構築性やその基準の恣意性を指摘するだけならば容易いかもしれない¹。しかし、民族識別による諸「民族」の枠組みは、新中国成立以降の60年間のなかで、あるいは民族認定以降の年月において、当該のそれぞれの民族の生活を規定している。中国の少数民族の生活世界は、民族認定を前提として生きられてきているのである。これと同じ状況は、中国の民族政策のモデルとなったソ連・ロシアの少数民族研究のなかでも指摘されている。シベリア先住民を研究する佐々木史郎は以下のようにいう。

結論を簡単にいってしまえば、現在、先住民はナーナイ、ウリチ、ニヴヒといった行政的に規定されたいわば官製の民族を自己の民族的帰属意識の対象として実体化している。（略）つまり、ソ連は国民を民族という単位で整理、把握する政策を執ったが、それを行政的に規定し直して住民を再編成し、戸籍に登録したのである。そして、固有文化の保護と称して、この官製民族を単位とする文化を学校その他の教育の場で人々の頭に刷り込んだ。さらに、コルホーズやソフホーズなどを結成して、人々を特定の村落に定着させるに際して、アムール川下流域では、この民族を単位に人々をまとめたのである。そして、それから三〇年以上たち、世代交代が進むとともに、官製民族は自らの帰属集団として人々の意識の中に定着した（佐々木 2003：54-55）。

前述のように、ソ連型の民族政策に倣った中国社会においても、同様の現象がみられる。ここでの当面の問題は、制度的に保障された官製の民族を単位とした人びとの意識や文化を「構築されたもの」と指摘することにとどまるのではなく、当事者たちに生きられたもの（lived experience）として、その生活の具体的現実において記述することにあるだろう。

資本主義社会においては、近代化という名の西欧化が民族文化の伝統と対立する、とい

1 日本における中国の民族研究では、費孝通による「中華民族多元一体構造」論が議論の焦点となることが多いが、ここでの「民族」概念そのものが、何かを中核とした本源性としてではなく、構築された枠組みとして想定されている（費 1989=2008）。

う局面が見られた。いっぽうで、社会主義的近代においては、資本主義社会とはいくぶん異なる近代化の様相があったのではないか。ソ連社会崩壊後のロシアの民族地域に入った人類学者は以下のように述懐している。

重要なのは、「国家と民族」、「生業経済と市場・資本主義」といった従来の人類学的知識で蓄積されてきた、近代性に関わる、伝統と近代の二元論的視座が、ポスト社会主義圏の分析ではあまり役に立たなかったことである。(略)「伝統」よりも「近代」が凌駕している生活世界というのが、調査地の村落に入った際、私が抱いた第一印象だった。その「近代」は私にとって身近で親しみを感じるものではなく、何と表現可能かといえば、「西側的ではない」としか言いようがないものだった(高倉 2008: 5)

ロシアにせよ中国にせよ、半世紀以上にわたり社会主義体制のもとですすめられてきた生活や社会制度の近代化のプロセスがある。それをここで「社会主義的近代」と呼ぶとすれば、その社会主義的近代においても、当然ながら、近代化と伝統文化が完全に融和していたわけではないだろう。改革開放以前の中国の少数民族地域においても、言語や一定の生業は維持されながらも、その社会変容は著しいものがあったし(坂部 2011b)、宗教などのようにその社会の近代化と相反するものとして否定されていったものもあつたはずである。社会主義的近代と伝統とのかかわりがどのようなものであつたのかを知るためには、中国社会で「国家によって認定された民族」の人びとが、その状況をどのように受け入れ、また反発し、改変してきたのかについてみていくことが必要である。

現在の中国においては、それぞれの地域の民族文化を観光資源として活用したり、また当該民族のアイデンティティを提示し共有するファクターとして、積極的に再興していこうとする動きがみられる(劉 2006)。人類学や社会学における観光研究の文脈では、先進国がヘゲモニーを握るグローバリゼーションの流れのなかの民族文化の観光化を、「強いられた主体性」として批判的にとらえる研究も存在する²。大きな構造的な関係性をとらえること、そこから批判的視点は評価できる。ただし、そこでとどまってしまうことは、中国の民族政策の問題性や制度的構築性を指摘するに終わる研究と同様に、それらの地域社会における人びとの動きをすべて「強いられた主体性」としてカテゴライズしてしまうことによって、今まさに現実のなかで人びとに生きられている地域社会のさまざまな営みを捨象することになってしまうのではないか³。そこでは圧倒的な構造的規定性の

2 日本の地域研究をフィールドワークにもとづき行っている足立重和は、観光化された伝統文化を肯定的に評価していこうとする流れを「伝統文化の構成主義」とよび、それを「外部から強いられた主体性」として批判している(足立 2004)。

3 外部的な視点で「文化の被構築性」を指摘することの意義自体を否定するわけではない。ただし

なかで、人びとがどのような葛藤や交渉、対応を行っているのか、どのような営みが行われているのかについての具体的経験の相にまで届かないのである⁴。

本研究では、中国の北方少数民族であるオロチョン族の民族イベントをとおして、彼ら自身が自らの民族的伝統をどのようにとらえ、表象しているのかを分析したい。オロチョン族は、内モンゴル自治区および黒龍江省を中心に居住する少数民族で、現人口は8000人程度の「小民族」である。彼らは50年ほど前に、山中での移動型狩猟採集生活から定住村での生活へと生活形態を変化させ、民族文化の象徴でもあった「狩猟」も10数年前に禁じられている。また民族語についても現在40歳以下の人びとにはほとんど継承されないなど、民族文化と伝統の危機感のなかにある。このオロチョン族を事例として、とくに2011年9月に、内モンゴル自治区フルンボイル市オロチョン族自治旗において開催された自治旗建旗60周年記念大会での三つのイベント（篝火祭、競技場での開幕式、劇場での公演）をとりあげ、その内容と構成、さらに参加者たちの意識のなかから、現在のオロチョン族にとっての「伝統」意識の諸相を明らかにしたい⁵。

外部からの構造的規定性のみを強調することは、その制度の内部にいるものの生活上の小さな取り組みを見えないものとしてしまうことにつながらないだろうか。オロチョン地域ではないが、同じフルンボイルのエヴェンキ族自治旗で出会った出来事を思いだす。エヴェンキ族の30代の若者の協力を得て周辺部の牧民取材をしていたとき、日本留学中の同地域出身の他の少数民族の若者が帰郷し、同行した。二人は幼少期からの親友で、共有できる話題も多いようだった。今は留学生である彼は政府の少数民族政策に強硬に反発した発言をしていたが、その親友である生活者の若者は、自分たちはその条件のなかで暮らしているんだということを強調していた。自分たちが一定の制約のなかにあることは当然ながら承知しているが、何もしていないわけではないというニュアンスが印象に残っている。

- 4 日本の中国民族研究が中国の民族制度を焦点とすることが多いのにたいし、中国の民族研究においては、特定の民族の歴史研究や歴史の記録、あるいは伝統や文化の内実を探索し、記録することをめざす実体的な研究が多い（たとえばオロチョン研究では、《鄂倫春族簡史》編写組・《鄂倫春族簡史》修訂本編写組 2008、関小雲 2003、内蒙古鄂倫春民族研究会 2008、など）。そのなかで比較的新しい視点を示しているのが、欧米のエスノグラフィを積極的に取り入れる何群のオロチョン研究である（坂部 2011a）。特記すべきであるのは、何は中国の民族政策の措置が現在の当該民族にどのような影響をもたらしたのかについて言及している点である。ただ、そこでは中国の民族制度がオロチョンたちの現代の生活にもたらす困難（自治旗制度の問題、飲酒、不自然死等の社会問題）に焦点が置かれ、社会主義圏の民族政策の特徴からくる状況までが想定されているわけではない（何 2006、2009）。
- 5 筆者は2008年夏に初めて阿里河鎮を訪れてから2011年まで、毎年数日から十数日ほど当地に滞在している。さらにオロチョン族自治旗内の獵民村および黒龍江省内にあるオロチョン民族郷である黒河市新生郷、塔河県十八站、遼河県新鄂郷、新興郷などを訪問してきた。オロチョン族にとっての自治旗の中心地である阿里河鎮内と、それ以外の獵民村、さらには中国の自治制度の枠外にある黒龍江省内のオロチョン族集落とは、たとえば何群（何 2009：33）が指摘するように明らかに

2. 三度の歴史的飛躍というシナリオ——建旗 60 周年記念大会

オロチョン自治旗建旗 60 周年記念大会は、オロチョンたち自身の地方政府として中国全体で最初にできた人民政府成立 60 周年を記念して、2011 年 9 月に開催された。10 年前にも建旗 50 周年の大会が開かれており、地方政府としては 10 年に一度の大規模な記念イベントの開催となる。60 周年記念大会は、対外的に大きく公開されることを前提に行われたものではない。外部からの主要な招待客は、内モンゴル自治区やフルンボイル市の政府関係者や、黒龍江省や北京などの自治旗以外の地域に居住するオロチョン族の幹部や研究者などである。一般の観光客や訪問者向けの宣伝や案内といったものは見かけず、報道関係者を除けば記念大会に参加していたのはオロチョン族の友人や親戚などであるようだった。地方政府主催の祝賀イベントという色彩が強い。

ここで、60 周年にあたって表明されていたオロチョン旗の発展史のシナリオは、以下のようなものである。

人口の少ない民族が、社会形態、生活様式、生産方式の三度の歴史的飛躍をなしとげた。この三度の生産生活様式の歴史的飛躍は、オロチョンの獵民にとって一種の思想観念の衝撃と変革であり、オロチョン旗の発展史において輝く光をたたえている⁶。

この「三度の歴史的飛躍」をより具体的にいえば、第一に、1951 年オロチョン旗が成立し、区域自治を実現させたこと。第二に、1958 年オロチョン民族が移動型狩猟生活から定住を実現させたこと、第三に、1996 年に全オロチョン旗において禁猟を実施し、現代的な産業を発展させる道筋にのったこと、となっている。またこれらの飛躍のプロセスは、オロチョン民族が主体的に推進し、獲得してきた成果であると喧伝されている。

オロチョン族は、中国北方の内モンゴル自治区東北部と黒龍江省北部を中心として居住しているツングース系の民族のひとつである。新中国成立以前には、おもに大小興安嶺の山地で狩猟採集を行い、年間をとおして山中を移動する生活形態をとっていた。2000 年の中国国内での人口は 8196 人であり、そのうち、内モンゴル自治区フルンボイル市にあるオロチョン自治旗に居住する人口は 2050 人である（鄂倫春自治旗史誌編纂委員会 2011）。

中国社会の発展史観からみて、オロチョンの人びとは、「小民族」であり「最後の狩

狩囲気異なる部分がある。ここではオロチョン族の民族イベントとして、自治旗内の僻地にある他の獵民村の人びとも参与するイベントの全体像を見ていくことで、こうした差異についても部分的に触れておきたい。

6 オロチョン自治旗 HP「和谐一甲子 跨越几千年——庆祝鄂伦春自治旗建旗 60 周年」より。
(<http://www.elc.gov.cn/zwgk/html/4495.html>) 2012 年 12 月 20 日アクセス。

獵民の一つ」である。前者は、「根蒂不深、人数又少」（費孝通）、人口が相対的に少ないことにくわえて、「社会発展のレベルが相対的に低く、伝統文化は全体として比較的単純」（何 2006）な民族として表現され、また後者は、原始公有制から社会主義への「直接過渡（直接的移行）」（《鄂倫春族簡史》編写組・《鄂倫春族簡史》修訂本編写組 2008：178-179）、「跨越（越え出ること、飛躍）」（麻 2003）をなした民族として表象される。60周年記念においてとりだされた「三度の歴史的飛躍」というスローガンは、こうした理解を背景としているといえよう。

3. 伝統的祭の再興と民族的伝統への意識

行政主催のイベントであるいっぽう、この企画には彼ら自身の祭典という位置づけもある。このとき行われた主要な行事は、以下の三つである。9月2日夜の「かがり火祭（篝火節）」と、9月3日午前の「開幕式」、さらに9月3日の夜（からおそらく数回）劇場で行われた「ウランムチ（烏蘭牧騎）」の公演である⁷。この開幕式、かがり火祭、歌と踊りの公演という演目は、大筋では通常のかがり火祭の内容に沿うものである。また、通例では6月18日に開催される自治旗主催のかがり火祭が、この年はこの式典の時点まで延期されている。

「かがり火祭」とはオロチョンの伝統的祭とされているもので、本来は嬉しいことやめでたいことがあると、かがり火を焚いて夜中まで歌い踊るといって火の神を祀る営みが発展したものであるという。現在の形態は、もちろん山中生活のときのものとは異なっており、『鄂倫春自治旗誌（2000～2009年）』によれば、「オロチョン族の伝統と人びとの願いにのっとり、1991年に、旗委員会と旗人民政府が毎年6月8日をかがり火祭の活動日と定めた」⁸（鄂倫春自治旗史誌編纂委員会 2011：97）とあり、この20年ほどのあいだに再興・再構築された民族活動であることがわかる。この再興されたかがり火祭の内容について『自治旗志』は、開幕式、伝統的体育競技、かがり火の夕べの三つの部分から構成されるとし、またかがり火の夕べでは、ウランムチ⁹の民歌や舞踊を鑑賞し、皆で歌い

7 このときのかがり火祭は、開催数日前まで、9月3日の晩に実施が予定されており、本来ならば、開幕式のあとに夜間のかがり火祭が開催されることになっていた。数日前に突然変更が明らかになったが、理由はわからない。9月2日当日は小雨が降る天候であったが、雨の切れ目をぬって決行された。

8 さらに『鄂倫春自治旗誌』の記述によれば、1991年に再開された当初は6月8日を開催日としていたが、この日は防火戒厳期間内のため、野外で火をたくことは安全ではないため、のちに6月18日に変更されたとある（鄂倫春自治旗史誌編纂委員会 2011：97）。

9 「ウランムチ」は漢字表記では「烏蘭牧騎」と書く。もとはモンゴル語で「赤い小枝」という意をあらわす「オラーンムチル」という（シンジルト 2010）。オロチョン自治旗のオロチョン人の

踊るものとして紹介している（鄂倫春自治旗史誌編纂委員会 2011：97）。これらの祭典の構成内容から見ると、2011年の60周年記念大会は、体育競技の部分の比重を減らし、規模を大きくした「かがり火祭」として構成されているとみることもできよう。

この伝統的祭の再現として開かれたイベントを、オロチョンにとっての民族文化の意味ということでは、以下の二点が確認できる。

第一点目は、当該民族としてオロチョン族の人びとを巻き込んでいく体制ができてきている点である。この時のイベントには、小中学校などの子どもたちの参加にとどまらず、拡散して居住している自治旗内のオロチョン族の主要人物が全体にかかわっていく体制がとられている。第二点目には、民族的な伝統文化が専門家集団によって担われているという点である。ここでは、内モンゴル自治区では著名な「ウランムチ」という文芸団体が大きな役割を果たしている。

3-1. 当事者として巻き込んでいく体制

具体的にオロチョン族がイベントにどのように参加しているのかを、当日の様子からみていってみよう。

開幕式では、関係者のあいさつが終わると、スタジアム内での出し物が始まる。競技場のトラックのなかに小規模な舞台が設営され、オロチョンたちの歩んできた歴史を、語りと芝居および踊りで再現するというストーリーである。とくにオロチョンたちの三回の転換期を強調した物語となっており、大興安嶺山中での「原始」生活から、三回の歴史的飛躍をつうじて、現在へと至る発展の道筋が表現されている。物語の語り手となるのは、各世代を代表するらしい4人の語り手である。さらにその語りのなかに挿入される劇中劇には、オロチョンの老女性と子どもがひとりずつ、熊や各種の鳥などの動物とシャーマンの扮装をした踊り手が20数名ほど登場する。老女性は、この阿里河に現在居住するオロチョンたちのなかで最高齢の一人である。

さらに男性の騎馬部隊が10数名、トラックに沿っていくどか疾走するという演出がなされる。この日のために数日前から馬たちが集められており、先頭を走るのは、オロチョン農民としては珍しい富豪の男性であった。オロチョンたちをあらわすのに「一匹の馬、一丁の銃」と表現されることがあるように、「馬」というのはオロチョンにとっては重要な指標である。オロチョンたちの居住地に隣合せて、同じような生活形態をとって暮らしていたエヴェンキ人たちは、馬でなくトナカイを飼育動物としており、その差異を際立たせる記号でもある。直前の予行演習では、会場内にいたオロチョンの老人たちは馬の走るシーンになると話をやめて、彼らの姿に見入っていた。

あいだではモンゴル語が一般の通用語ではないため、ここでは「烏蘭牧騎」を漢語読みした「ウランムチ」と呼んでおく。

この会場の出演者として圧倒的多数を占めるのが、小中学生たちである。全員が毛皮風のオロチョンの衣装を着て、主要なストーリーの展開にあわせてマスゲームのように動き回る。数百名の子どもたちが学校ごとに集められており、教員に伴われながら数日前からこのスタジアムで一日中練習が行われていた。

とくにこのイベントのなかで特記すべき出演者は、各「獵民村」¹⁰ 代表のオロチョンたちであろう。場内には6～7個の天幕が建てられて、そこに民族衣装を着たオロチョンの人びとが集まって座っている。天幕は「仙人柱」と呼ばれるオロチョンの伝統的住居で、細い白樺の木材を円錐形にたてて、その周囲を夏は白樺の樹皮で、冬は毛皮で覆う。このときは夏の住居風に布が巻きつけられていた。一つ一つの天幕は、オロチョン自治旗内のそれぞれの獵民村を表しており、そこに獵民村から招かれた20～30名ほどの代表者が座っている。彼らはこの機会にあわせて一週間ほど前から自治旗内の各村から集められている。演出としてはあまり大きな動きはなく、全体の進行にあわせて数回輪になって踊るシーンがあるだけで、あとはこの天幕の脇にずっと座っているだけであるが、自治旗の中心地である阿里河に居住する人びとと中心に作られている今回のイベントのなかで、周囲の村に住む一般のオロチョンたちが参加する場所として確保されているようであった。この代表者たちは年配者から20歳前後の若者までさまざまであるが、各村の代表者として招待されている人びとである。

こうした当事者として人びとを巻き込んでいく体制づくりにとって重要な役割を果たしているのが、「民族研究会」である。民族研究会は、民族文化の研究・保存等に関心のある人びとの集まりであるが、事務局は地方政府に所属し、外からの研究者の調査や行政関



写真1 開会式の練習に集められた獵民村の人びと（筆者撮影）

10 都市居住者以外のオロチョンたちは、身分証のなかで「獵民（狩獵民）」とカテゴライズされている。かれらの定住村を、現地では「獵民村」と呼ぶ。

係の視察の対応を行ったり、文化的なイベントをサポートするなどの活動をしている。また、オロチョンの民族文化や社会生活などさまざまな研究報告を載せる『鄂倫春研究』を発行しているのもこの団体である。民族研究会では、地域にすむオロチョンの老人たちについても情報を丁寧に集約しており、必要に応じて連絡・召集する。外部の研究者なども所属しているが、基本的には自治旗内のオロチョン族が多いらしく、政府幹部、ウランムチの引退者なども参加している。現時点では、年配の人びとには民族語や過去の生活の継承者も多い。

今回のイベントのなかで、開幕式の各集落代表として参加し、民族研究会のメンバーとしてウランムチの芝居にもエキストラとして参加していた男性は、今回の大会への参加の感想を以下のように述べている。

われわれオロチョン族の60年、60周年記念の公演に参加するのは、すごい感激だ。何とかしてでも参加しなきゃね。俺たちの民族の名誉のためさ¹¹ (30代半ばオロチョン男性、職員)。

さらに、当該のイベントそのものには参加の機会がなかった若者のなかには、ボランティアとして、かがり火祭会場脇のホテルの仕事をしたり、バスガイドとして参加する者たちもいた。数日前から研修を繰り返し、式典の前後は朝6時前から夜11時過ぎまで、民族衣装を着ての案内役という立ち仕事ではあるが、彼らにとっては一種のイベントへの参加機会ともとらえられているようであった。

3-2. 専門化する「民族文化」

今回60周年の記念大会にあわせて、阿里河では劇場が新設された。数百人の座席がある劇場では、内モンゴル自治区の各地域でそれぞれ活躍している劇団であるウランムチ(烏蘭牧騎)の公演が行われた。今回の公演では出演者は劇団員を中心に組織され、演出、監督は北京から招かれ、一か月以上前から準備が行われてきた。オロチョン旗のウランムチは、舞踊隊と歌唱隊および楽器隊に分かれて専属の団員がいる。今回の記念公演には、団員以外に、団員のオロチョン族の子どもが2、3人と、民族研究会所属の中老年のオロチョンの人びとが10人ほど、舞台上で演技をするエキストラとして参加している。

実際の上演は、9月3日の夜の公演を皮切りに、数回程度、各地から招かれた幹部を対象として行われたようである。劇場はチケット制になっており、一般の人びとは正規公演のチケットは簡単には手に入れない。ただし、開幕の数日前から、衣装を着けてのりハーサルが繰り返されており、近所の人びとや団員家族などはその機会にけっこう観覧に

11 2011年のインタビュー・データより翻訳。



写真2 主としてウランムチ団員によるリハーサル

訪れていた。

ウランムチは、1950年代、内モンゴルで誕生したアマチュア文芸団体であり、当初は専門性、制度性、権威性をもつ文工団や歌舞団にたいして、大衆性を特徴としていたという。内地の文化館の牧畜地域における発展形であり、一定地域に居住していない牧畜民にたいして、劇団自身が馬や馬車で移動して、人びとのいる地域を回っていた。主な仕事は、公演、宣伝、指導、サービスとされており、機動性のために少人数で回りながらも、劇団での踊りや歌の公演のほかに、地域の生活支援も行っていた。

こうしたウランムチの活動が拡大していくのは、1960年代前半に毛沢東による文芸界批判があり、64年に全国少数民族アマチュア文芸コンクールに内モンゴルのウランムチが出演したさいに、高い評価を得たことからくるという（シンジルト 2010）。その後、内モンゴル自治区内や各地で、ウランムチが設立されるようになる。

オロチョン自治旗のウランムチは1963年3月17日に設立されている。当初は、隊員がわずか15名であり、公演を主に、スライド上映、移動展覧会、衛生の宣伝、移動図書販売、文芸指導を行ったとある。昔のウランムチに所属していたというオロチョンの女性は、山中で猟をしているオロチョンたちのところまで出かけていき、移動や舞台作りから、出演その他の仕事だけでなく、山中の人びとの生活の手伝いなども行い、「なんでもやったよ」という。

オロチョン旗の現在のウランムチは、地域の職業的芸術家集団という存在である。現在の団員は、舞踊隊、楽器隊、歌唱隊をあわせて91名にのぼり、団員の民族も、オロチョン、エヴェンキ、ダウール、モンゴル、漢族など多様である。当初は、歌が得意だという程度で入団したり、とくに芸能に関係していないメンバーもあり、入ってから様々な仕事や役割を身につけたというが、現在では若手の95%くらいが舞踊学校・音楽学校の卒業生である。舞踊隊は17、18歳から20、21歳で入団し、35歳くらいまでが現役であり、

その後は演出家、教師、文化館など他の職に回る。歌唱隊の人びとは50代くらいでも活躍している人もおり、現役時代はもう少し長い。

今回の60周年記念イベントのなかで、ウランムチの公演は「勇敢なるオロチョン」というタイトルのミュージカルであり、振付と演出は外部から指導者が来ていたが、出演者は主に団員であり、一か月以上前から練習を重ねていた。内容は大興安嶺の山中で暮らすオロチョンたちの春夏秋冬の生活を示すものであり、狩猟の喜びや、熊との対決、シャーマンの踊り、オロチョン語での歌などが盛り込まれている。また、かがり火祭での歌い手も、さらに、開幕式での人びとにダンスや動作の指導をしていたのも、ウランムチの団員たちである。この地域の歌と舞踊の専門家集団として活動している。

彼らの団体としての活動は、地域における芸能団体としての活動が中心だが、古くからの個々のウランムチの団員たちのなかでは、民族の歌や舞踊の継承ということも意識されている。たとえば、現在、歌手のなかで最高齢のオロチョン女性の一人は次のように述べている。

(40年前に) どうしてウランムチをつくる必要があったのか。わたしたちの民族の文化を伝えていくためよ。もしこのウランムチがなければ、民族文化はきっと広められてはいなかった。今のようなこんな感じで続いてはいなかった、でしょう？日本と同じように、あなた方の民族文化は、現在までいつまでも伝えられている。それはあなた方が伝承しているからでしょう¹² (58歳オロチョン女性、歌手)。

オロチョン旗のウランムチは、オロチョン民族だけで構成されるものではないが、その他の地域に、これだけの規模でオロチョン民族を代表する芸能団体は存在しない。先の女性の言葉は、こうした彼らの立ち位置と自負を表明しているものと考えられる。現在、オロチョン自治旗の若者のなかで民族語を使えるものは、かなり減少してきている。40代くらいの方が日常的に民族語を使用している最後の世代ではないかと思われるが、その世代の歌手の一人は、オロチョン語での歌い手ということを意識する。

前にいた指導者がわたしに言ったのは、あなたはほかの団員とは違う。オロチョン人だから。あなたには自分の言葉があり、言葉ができる。あなたは、自分の民族の民歌やいろいろな文化を伝えて、広めていかななくてはいけないよ。この仕事をやり遂げるべきだよ。多くの生徒たちに教えなさい。とりわけオロチョンの生徒たちに。彼の影響はとても大きかった¹³ (40代オロチョン女性、歌手)。

12 2011年のインタビュー・データより翻訳。

13 2011年のインタビュー・データより翻訳。

彼女は、個人的に、オロチョンの子どもたちに、言葉を教えるボランティアなども行っているという。こうしたなか、オロチョンの民歌は、若干の中老年世代を除けば、ウランムチの専門的な歌い手のなかで継承されているともいえるのである。

4. 「強いられた主体性」そのものを生きること

オロチョンの民族文化の中心は狩猟と移動生活にかかわる生活文化である。文字を持たない民族として、古くからの語りによる伝説の伝承（ジャンダーレン）、シャーマニズムにまつわるもの、白樺の樹皮や毛皮などの加工品、山菜や動物などの食料化に関する知識、民歌と踊りなどが代表的である。このうち、ジャンダーレンとシャーマニズムにかかわるものは、老人世代に若干の担い手がいたり、知識があることを除けば、次世代に受け継がれるものとなっていない。白樺樹皮の生活用具については、船などの大きなものは現在作成できる人も限られてきている。そのなかでは、芸術学校の卒業生たちによって担われ、「専門芸術化」されたかたちであるとはいえ、オロチョンの歌と踊りとされているものは民族文化として積極的に継承、維持されているもののひとつである。こうした芸術団体ウランムチに所属するオロチョンの若者は次のように述べる。

この（芸術）団の将来については、期待は大きいな。今は、指導者たちのレベルでもこういった文化事業や、伝統民族芸術の保存、保護にたいする注目、関心が高まっている。だんだんこうした見方や関心が高まっているんだ。これからはあちこちの指導者層の支持を得て、また我々それぞれの団員の努力も含めて、将来の見通しはすごくいいと思うよ¹⁴（24歳オロチョン男性、ダンサー）。

ただし、こうした民族舞踊などのモデルが、必ずしもオロチョンの民族文化だけにあるわけではない。同じウランムチに所属する若いダウールのダンサーは、先住民文化全般に興味があるとしている。

他のところで勉強したいとも思う。必ずしもこのオロチョン族だけじゃなくて。ただまだまだいっぱい勉強したいよ。他の民族、ダウールやエヴェンキなんかも。外国にも行って、いろんな民族のことを理解してみたい。ほくは個人的にはインディアンのが好きなんだ。すごく懂れる。とっても神秘的だよ¹⁵（28歳のダウール男性、ダンサー）。

14 2011年のインタビュー・データより翻訳。

15 2011年のインタビュー・データより翻訳。

こうした民族文化の拡散や専門分化という事態は、オロチョンの生活形態の変容と大きくかかわっている。今回の60周年記念大会の各イベント構成するスローガンであった「三度の歴史的飛躍」というシナリオでは、50年代にあった二度の飛躍に加えて、96年の「禁猟」が三度目の飛躍としてとりあげられている。現在のオロチョンたちにとって、この90年代の「禁猟」という施策のインパクトは大きい。ある40代のオロチョン幹部は、60周年記念に向けて原稿を書き上げ、そのなかで以下のように記している。

「禁猟」というのは中性的な単語で、「狩猟禁止」と等しい。しかし、これに『被』という字を加えると、意味は自然と広がる。1996年オロチョン猟民は主体的に猟銃を手放した、あるいは、主体的に猟銃を手放させられたともいえることが、オロチョン民族文化の発展の分水嶺だった¹⁶。(40代オロチョン男性、政府幹部)

通常、オロチョン旗政府が決定した「禁猟」政策は、「オロチョンたちは自らの意思で、猟銃を手放した」と表現される。しかし、上記の文章からうかがわれるのは、オロチョンたちの主体性が「強いられたもの」であることを、本人たちもよく知っている、という点である。

しかし、おそらく、外部からの影響のなかで否応なしに選択され、断片化されていく伝統文化であったとしても、そこに関わりをもちうることは、やはり人びとにとって一種の生活上のチャンスでもあると意識されているのではないだろうか。イベントの主要な担い手であった民族研究会やウランムチに属する若者ではなく、オロチョン民族郷からやってきた各村の代表たちに、大会参加の感想を聞くと、以下のような答えが返ってきた。

オロチョンの60周年記念に参加できるのは、すごく光栄だよ。だれでも来れるわけじゃない¹⁷ (20歳前後オロチョン男性、民族郷から)。

彼は開幕式で、野外テントのまわりで円形に座するという役回りのために、オロチョン民族郷からやってきた若者である。自治旗には、阿里河、托扎敏(木圭、希日特奇)、烏魯布鉄、多布庫爾、諾敏、古里などのオロチョン猟民村があり、それぞれの村ごとに30人前後が召集されてきていた。参加者は60歳すぎの老人から20歳前後まで、年齢はまちまちである。体育競技場では一週間ほど前から予行演習が繰り返されてきたが、各村の代表者たちは、集落ごとに用意されているかつての住居(白樺の幹を円錐形に建てて、その樹皮で覆ったもの)の周囲で一日中座って待っていた。準備も含めて大変ではないだろうか

16 当人の草稿より翻訳。

17 2011年のフィールドワーク・データより翻訳。

と尋ねると、別の若者は「ふだんは家にいても何かあるわけじゃないし」¹⁸という。彼らの周囲には、イベントに参加する機会自体がない人びとの存在がある。

60周年の記念式典は、もともとの民族文化をちりばめた現代的なイベントにすぎないかもしれない。しかし、そうした形式での民族文化の高揚に、人びとはそれぞれの立ち位置から参与しているといえるだろう。

5. むすび

オロチョンの人びとにとって、現在、自分たちの「民族の伝統」はどのようなものとしてイメージされ、とりあつかわれているのか。

現在、オロチョン民族文化の積極的な伝達・継承の中心となっているのは、60代から40代くらいの世代である。オロチョンの民族文化とされているものは、先にも述べたように、狩猟と移動生活にかかわる生活文化である。それを支えてきたものは、彼らの一定の生活様式と民族言語であろう。この60代から40代くらいの世代というのは、オロチョンの生活様式として、年間をとおしての山野での移動型狩猟採集生活に触れえた最後の世代ということになる。60代の人びとのかなりの部分が山野で生を受け、子どものときから両親とともに山中を移動してきたという直接的な経験を持っている。40代くらいになると、折に触れて、山野に連れていかれた断片的な経験を持ち、周囲の大人の生活を見聞きしてきている世代ということになる。また、オロチョン語を不自由なく使用できる世代もこの40代くらいの人びとまでである。

オロチョンの人びとの生活様式の変遷を考えると、半世紀ほど前に行われた村への定住化の影響はかなり大きかった（坂部 2011b）。両親は山で猟を続けるにしても、子どもたちは村で学校へ通う。定住村は山間の小規模な集落とはいえ、そこでは政府の援助もあり、恒久的な家屋がたてられ、医療や教育なども導入されていく。そのことは、狩猟採集の移動型生活を行ってきた人びとの生活世界に、近代的な生活様式が持ち込まれる契機となった。また学校教育をとおして、文字を持たない民族語の世界に漢語世界が導入される¹⁹。この定住化前後の20～30年間に生まれた世代の多くの人びとが、オロチョン語と漢語をとともに流暢に使用するバイリンガルであるが、それ以降の世代にはオロチョン語が継承されていることは少ない。

18 2011年のフィールドワーク・データより翻訳。

19 これ以前にも、オロチョンたちは他言語や文字をまったく知らなかったわけではない。植民地期には日本語教育も行われているし、それ以前は、満洲語の読み書きができた長老もいたという。漢語やロシア語、ダウール語を解するものもいたと思われる。ただし、そうした他言語も理解できたのはごく一部であり、50年代以降のように、同世代のほぼすべての人びとがそうした世界に触れていたわけではないだろう。

その意味で、中国における社会主義的近代は、オロチョンたちの生活世界において、両義的な働きをしたといえよう。一方で、社会主義時代の当初の施策は、彼らの生活に医療、教育などの一定の近代的制度を持ち込んだ。多くの人びとが学校教育を受けたことは、その他の社会に接続するための契機となったし、固定家屋の建設や医療体制の整備は直接的に生活条件の向上にもつながっている。ただし一方で、解放後から80年代くらいまでの近代化施策の中心は、オロチョンの人びとの中心的な生業を覆すにはいたらなかった。彼らは以前と同じように狩猟を行い、さらに山林管理といった伝統的生活形態と連続性のある作業を行ってきた。こうした条件が大きく崩れるもととなるのが、90年代にはいつてからの禁猟措置と、言語の消滅への危機意識である。オロチョンの人びとが「伝統文化」として意識しているものの内実、かれらの伝統的生業や言語に依存している。その意味では、先のオロチョン幹部の感慨にもあるように、とりわけ猟銃による狩猟の禁止という政策は、彼らの民族文化を支える環境そのものが失われていくきっかけになったともいえるだろう。

市場経済化後の社会変容は、これまでのように、社会制度で保障された生活ではなく、資源にもとづく競争という状況を生み出すものである。そのなかで、少数民族の人びとは、中国社会のなかで漢民族ともその他の民族にたいしても一元化された条件のもとで生存の道を切り開いていかななくてはならない。小中学生を対象とした民族語教育も行われているとはいえ、そうした特別クラスが一般的になりにくい状況が存在している。しかしまた、競争社会のなかでは、民族性は一つの資源として活用しうる。民族的な色彩のある景色や生活文化を売り物にした観光村などの建設は、そうした流れのなかにある。政府主催の民族イベントであれ、一定の解釈を施された専門家による民族舞踊の活用であれ、それらが彼ら自身の民族文化の発揚の場として意識されているのである。

大興安嶺地帯にあるオロチョン自治旗は、内モンゴル自治区ホロンボイル市のなかでもいちばんの辺境にある。ハイラルやハルビンのような空港のある大都市から、日に1、2本の列車で一晩かかる。民族文化の観光化や商業化といった状況からはいまだ遠いのはあるが、本稿でみてきた彼らなりの民族文化の維持・伝承という試みは、こうしたマクロな社会変容に対応するための人びとのささやかな実践という側面ももっているのではないだろうか。

謝辞

本稿を構想し執筆するまでの過程で、多くの方々にお世話になった。オロチョン自治旗でわたしを迎えていただいた人びとに深く感謝する。とりわけ民族研究会の関紅英氏には、数年間断片的に調査に訪れるわたしに、辛抱強くご対応いただき、さまざまな人たちとの出会いをもたらしていただいた。記して感謝する。

本稿は科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金（基盤研究（C））（2011年～

2013年および2014年～2016年）の成果の一部である。

参考文献

（日本語）

- 足立重和、2004、「地域づくりに働く盆踊りのリアリティ——岐阜県郡上市八幡町の郡上おどりの事例から」、『フォーラム現代社会学』第3号、83-95頁。
- 窪田幸子・野林厚志編、2009、『「先住民」とはだれか』、世界思想社。
- 坂部晶子、2011a、「中国少数民族の人類学的・社会学的研究についての一考察——主として何群『民族社会学和人類学応用研究』をとおして」
- 坂部晶子、2011b、「北方民族オロチョン社会における植民地秩序の崩壊と再編」、『帝国崩壊とひとの再移動——引揚げ、送還、そして残留（アジア遊学145号）』、勉誠出版。
- 佐々木史郎、2003、「ロシア極東地方の先住民のエスニシティと文化表象」、瀬川昌久編『文化のディスプレイ——東北アジア諸社会における博物館、観光、そして民族文化の再編』、風響社。
- 佐々木亨、2002、「満洲国時代における観光資源、展示対象としてのオロチョン」、煎本孝編著『東北アジア諸民族の文化動態』、北海道大学図書刊行会。
- シンジルト、2003、『民族語りの文法——中国青海省モンゴル族の日常・紛争・教育』、風響社。
- シンジルト、2010、「オラナムチル現象にみる内モンゴル・インパクト」、小長谷有紀・川口幸大・長沼さやか編『中国における社会主義的近代化——宗教・消費・エスニシティ』、勉誠出版。
- 瀬川昌久、2012、「中華民族多元一体構造論と民族行政の現場における民族認識」、瀬川昌久編『近代中国における民族認識の人類学』、昭和堂。
- 高倉浩樹、2008、「序 ポスト社会主義人類学の射程と役割」、高倉浩樹・佐々木史郎編『国立民族学博物館調査報告78 ポスト社会主義人類学の射程』、国立民族学博物館。
- 西澤治彦、2008、「解題——費孝通の『中華民族の多元一体構造』をめぐって」、費孝通編著（西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人共訳）『中華民族の多元一体構造』、風響社。
- 費孝通編著、西澤治彦・塚田誠之・曾士才・菊池秀明・吉開将人共訳、1989 = 2008、『中華民族の多元一体構造』、風響社。
- 麻国庆、2003、「狩猟民族の定住と自立」、『人文学報』第338号。
- 劉正愛、2006、『民族生成の歴史人類学——満洲・旗人・満族』、風響社。

（中国語）

- 《鄂倫春族簡史》編写組・《鄂倫春族簡史》修訂本編写組、2008、《鄂倫春族簡史》、民族出版社。
- 《鄂倫春族自治旗概況》編写組・《鄂倫春族自治旗概況》修訂本編写組、2009、《内蒙古・鄂倫春族自治旗概況》、民族出版社。
- 鄂倫春自治旗史誌編纂委員会、1991、《鄂倫春自治旗誌》、内蒙古人民出版社。
- 鄂倫春自治旗史誌編纂委員会、2001、《鄂倫春自治旗誌（1989-1999）》、内蒙古人民出版社。
- 鄂倫春自治旗史誌編纂委員会、2011、《鄂倫春自治旗誌（2000-2009）》、内蒙古文化出版社。
- 関小雲、2003、《大興安嶺鄂倫春》、哈爾濱出版社。
- 何群、2006、『環境与小民族生存——鄂倫春文化的變遷』、社会科学出版社。
- 何群、2009、『民族社会学和人類学応用研究』、中央民族大学出版社。
- 内蒙古鄂倫春民族研究会、2008、《保護与伝承——鄂倫春民族文化研討會論文集》。

全国政協文史和学习委員会暨内蒙古自治区、黒龍江省政協文史資料委員会編、2008a、《鄂倫春族百年実録（上冊）》、中国文史出版社。

全国政協文史和学习委員会暨内蒙古自治区、黒龍江省政協文史資料委員会編、2008b、《鄂倫春族百年実録（下冊）》、中国文史出版社。

キーワード 中国少数民族、オロチョン、民族イベント、伝統、かがり火祭、
歴史的飛躍、禁猟、民族研究会、ウランムチ

(SAKABE Shoko)